

京鹿子

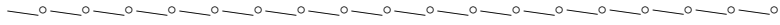
昭和二十三年九月二日第三種郵便物認可
平成二十二年十一月一日発行
通巻一〇三五号(毎月一日発行)

11月号

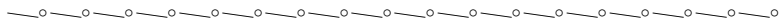
豊田 都峰
漣響集 その十五

積迦堂へあと七丁のせみしぐれ
しをりなき野路の露めく石仏
蝉しぐれともに聞きたまふ融公
とんぼわく藍につらなる山の日
おはぐろの曳く水おとの暮れてゐる
おはぐろの翅たたむたび瀬音やむ

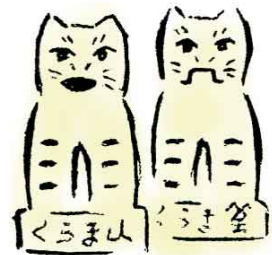




角切らる時のまなこはそらの色
角切られ大きな宙を失へり
杜を洩る日矢背景に角なき鹿
川越えて秋蝶となる風のすぢ
秋蝶となりけり日を脱ぎ風を脱ぎ
ゆふぐれをまきちらしめる秋蝶よ
わが星図あしたへ読んで賢治の忌
底紅を咲かせ世嫌かぶれかな



伊吹山 丸山佳子



八号線に日の丸一本敬老日
標高千に無にも有にもなる尾花
見下ろせばライバル咲きの曼珠沙華
神無月地球ゆるりと廻り欲し
神無月なれど伊吹に神通力

秀華採集

やはらかい時間のなかで桃を剥く

柴田 朱美

全体の表現が意図的に桃に集中するように設計されている。特に「やはらかい時間」の措辞がよい。

浮世絵に戻りたくなり髪洗ふ

山中 志津子

羅の母の立居の水のごと

大西 逸子

前句の大胆な発想に驚くが、大袈裟な髪形より洗髪感じのものであろう。そして新しいものより、見慣れた感じの髪形への指向もあろう。いろいろ思わせて楽しい。後句は「水のごと」としたことであたいへん羅の立居そのものになった。

鈴鹿 仁

鉦 叩

禱るといい願ふといいて鉦叩

消印の近くて遠し秋闌くる

秋深し池の水輪が人諭す

萩まつり二句

父子三代萩詠みつづけ宮の鈴

ひとすぢの風のささやき萩招く

近 詠

和田 照海

夜 光 虫

夜光虫闇に紛れし倭冠の島

退き浪に玉鳴り浜や夜光虫

漁り火の青ざめてゐる夜光虫

灯台や波の秀ごどの夜光虫

七卿の落ちし浜とや夜光虫



神麓集

金や銀箔をばらまく紅葉映ゆ
箔散らし描きし日々の軒忍
切りつぎや曲線描く荻の花
継ぎ紙に目を奪はれし藤袴
深む秋二いろ以上の紙を継ぎ

林 日圓

梅雨の蝶
恋の字を書くつもりらし梅雨の蝶
百合開く最も美なる容して
アガパンサス簪咲きにはじまりぬ
咲きのぼる凌霄花よりベビーカー
咲きほこる凌霄の花に好き嫌ひ

北村 香朗

桐一葉
灯点せばゆらめく風の盆提灯
形見なる端溪硯洗ひけり
桐一葉地につくまでのしじまかな
一葉また一葉と暮れをせかしをり
身の伽を嘆けば一閃星飛べり

藤岡 紫水

夕焼の向かうが見たい旅ごころ
田草取る重い時間を動かして
影ばかり歩いておりぬ炎天下
驛長が手を挙げたから梅雨終る

松田 都青

ひと口を食べ余し逝き蟬時雨
夏山に永遠の眠りの羽たゝむ
夏雲へ茶毘の煙となり還る
終焉は枢ひとつよ蓮の花
骨壺を抱けば銀河濃し丹波

服部 郁史

秋暑し名を忘れたる人と居て
瓢の突くびれ正しく揺れて居り
雨あしの音そぞろなり水鶏鳴く
お隣りと朝の挨拶木槿垣
墓地に来て竹の春なりはからずも

船越 美喜



神麓集

寺の名は忘れあぢさゐる寺とのみ
あまたある雨の名「緑雨」がわが好み
幻住庵もり二匹の住む清水
花籠に額一輪の冴えざえと
ポンポンダリア陽気な仲良し姉妹住む

丹生をだまき

氷枕はなせぬ酷暑まだ微熱
夏バテや体力・気力なえるのみ
魔性の腕より逃れられ得ぬ猛暑
曆にある立秋の文字役たたず
立秋の期待もむなし微熱まだ

山田をがたま

枯木立 竹貫 示虹
そこらぢゆう淋しくなりぬ木の葉髪
一枚の枯葉手に又歩き出す
門燈のぼつと點りし一葉忌
この道や落葉の音のまへうしる
生老病足りてそれから枯木立

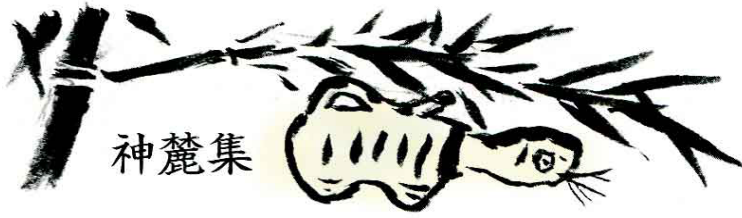
三高寮歌 北川 孝子
銀漢やこころの巖にとどくもの
いちにちの悲喜あやなせり遠銀河
すらすらと三高寮歌銀河澄む
一途なる意志たのもしき大暑かな
木挽道スローカーブの生きざまよ

晩夏

柴田 朱美

指紋うすれ晩夏の素手が重くなる
風紋に風の貌あり晩夏光
墓石にも晩夏のうしる姿あり
戦跡に晩夏の雨が狂ひけり
蝶番錆びて晩夏の納屋傾ぐ

土産の白うさぎ 伊藤 希眸
捨て畑の土鮮らしき土竜塚
朧夜や土偶の巫子の歩きだし
猛暑とな土曜の午後の街静か
早起きの手に手に土用干しの紐
月へ行く土産は手乗りの白うさぎ

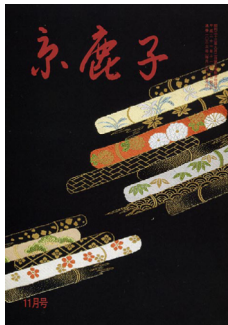


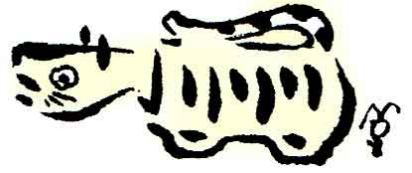
神麓集

こ
つ
丸井 巴水
浮き沈む水母に小さき智慧袋
磨崖佛斜見の速さ秋燕
空爆の夜よ八月の星を見ず
朝市の婆より座りよき南瓜
姉威張りせし酸漿を鳴らす骨

川崎光一郎
夏瘦せて臓器の不全入院す
寝返りもできぬ点滴夜半の夏
吸入の酸素の沁みる肺涼し
桜桃の一粒映ゆる患者食
炎天のむつとかむさり退院す

小堀 寛
東ね髪母はまぶしき五月かな
蟻の角甘さ青さをふり立てて
炎昼や海の神殿にごりをり
あけぼのや南瓜は寝まるかぼちやかな
入道雲平家を名告り崩れけり





京鹿子集

豊田都峰選

湾ひとつ増嶋となりて大花火

やはらかい時間のなかで桃を剥く

青柿は境界線を犯しけり

配膳の皿ごと溶ける大夕焼

浮世絵に戻りたくなり髪洗ふ

黒揚羽捉まへてゐる午後の熱

自分史にカサブランカを点滴す

七夕竹天の投網は濡れもせず

青楓なだるる彼方通天橋

簡潔な僧の法話や白桔梗

鎌倉 柴田 朱美

京田辺 山中志津子

京都 大西 逸子

ふるさとへバスは四便独活の花

羅の母の立居の水のごと

夕虹や伝へたき人多くゐて

逃げ水やマヤ文明の調査隊

父の娘と労りあひつ夏登山

アリゾナの友に妻より無肥トマト

干し物を取り込む腕に西日さす

ぎらぎらとアスファルトに大西日

孫の手は線香花火と仲良しで

秋茄子と俳号頂き茄子漬ける

江戸 伊吹 之博

渋川 東 秋茄子

梅雨人の満堂揺らす全盲ピアノニスト

さま

神田 惣介

満竿に干すサツカー着梅雨晴間
ちびつ手のパジヤマ揃へて夏休

レース編残して叔母は黄泉の国

梅雨晴れ間線路にせまる濠の水

涛々と雲を押し出し天の川

立葵雨のやむ日の母と子よ

七月の薄暮につつみの友とあゝ

沙羅散りていつしか夢路とはなりぬ

遠き世の甲骨文字梅雨滂沱

梅雨明けて乾盃すべき雅友なし

永田町あたりよく落つはたた神

あざみ沿線ふるさとのない長女二女

軍鶏の一と蹴り八月近くする

時刻表なき列車ゆく熱帯夜

大南瓜ざくつと割られ鉄匂ふ

母追つてぼんぼんダリヤ出奔す

ふはふはのガラス向日葵まきこんで

睡蓮の水方円に従へり

滴りのかたちに少女愁ふかな

棲むほどに隠元豆の蔓のびし

背のびしてちよつと観にけり踊りの輪

椎の実のまた一粒を拾ひ上ぐ

そそくさとよくもこまで梅擬

つゆ晴れの干蛸踊る輪島かな

磯蟹や義経かくしの狭き洞

夏潮のうねり呼びあふ千枚田

夏草や崖半疊の狼煙跡

文月や肋の多き魚干され

こほろぎが線路を歩く無人駅

ストレスをぶくぶく吐けり熱帯魚

夕づきて色やはらかき合歡の花

向日葵へ一人あるきの好奇心

流星へむかしく同じ願ひ言

肘少し触れて隣も暑き人

ひと言の多きを悔いて遠火花

ふる里をつなぐ使者なり夕かなかな

車窓より見上ぐ漆黒ながれ屋

料亭の手水の小石夕ひぐらし

梅雨明けてギラギラ坊主とび出しぬ

笹に乗る鮎の大きさ風を聴く

仏間より百合の風抜け居間閑に

幼稚園のお泊り会に合歡の風

甚平の児に草の風夕の風

布川 孝子

佐々木紗知

高野 春子

浦安 安田 一郎

松戸 岡山 敦子

岡田 愛子

直江 裕子

伊藤 希眸

千葉 河内 桜人

戸田 中村江利子